

## 名古屋市における明治時代の工業化

川 崎 敏

## 一 序

現在の工業地域の発生は巨視的にみれば二つの形態がある。一つは古い伝統を基盤にして形成されたもので、他の一つは伝統とは無関係に成立したものである。日本のおもな工業空間は前者の場合が多く、名古屋の場合も同様であるが、この伝統を基盤とした工業化の例として課題を設定する。明治時代の名古屋の工業化は江戸時代からの歴史的伝統と周辺地域の農村工業の影響を受けながら、その空間を成立させているが、必ずしも発展のテンポは早くなかった。それは京浜や阪神地方が早くから国家資本と結びつき、技術の導入を急いだのに比して、名古屋は国家資本との結びつきが遅く<sup>④</sup>、また地元商業資本も工業資本に投下される比率が低く、大企業的な生産形態をとることが遅れた。であるから産業革命の進行はおそく、綿紡その他の若干の企業を除けば、永らくマニユ的形態による生産が行なわれている。工業生産のシェアの高かった織物や陶磁器工業の如きも、明治時代を通じて前近代的な道具を使用し、零細的な経営を行っているのがみられる。

名古屋は洪積層の台地が東部から西部に向つて存在し、さらに細長く南部に突出しているが、この台地の周辺部は湿地で、江戸時代以前から明治時代にかけては、ほとんど水田地帯であった。城下町はこの台地の西北部に建設され、宿場町・門前町熱田は細長く突出した最南部に建設されている。明治になるとこの地形が市街地の建設や工業地域の成立に影響し、初期の工業は何れも東部と南部の台地上に伸長している。しかしやがて沖積地の一部にも工業化が現われ、新しいパターンを形成してくる。特に明治二〇年、国鉄東海道線の開通と共に道路の建設や市街地化は、灌漑用水路の潰滅をもたらし、この湿地地帯も漸次乾燥化し、二六年愛知郡下広井町（名古屋駅附近）に設立した三重紡績愛知分工場の操業したところから、急激に工業化している。しかし明治時代の工業地域は、ほとんど洪積台地上に展開し、低地工業化は台地の辺縁部に僅か拡散した程度である。

ここでいう筆者の工業化とは、無工業地域が有工業地域へ、次元の低い工業地域が高次の工業地域に転換することの意味する。それには時代を背景とした人間の力によつてもたらされた外来や内来から生ずる技術や資本などが問題とならう。しかし工業の歴史地理学的研究は、工業の業種、規模、動力、労働人などの歴史的過程における地域の消長を追求する必要がある。AとBの微地域は時代によつて立地の類似と相違の現象を生じている。本論は名古屋における明治時代の工業化が如何なる過程のもとに地域を形成したか、時間と空間の関係を捉えながら、工業地域形成の意義について述べてみたい。そしてこれが基盤となつて、現在の名古屋工業地域を出現させたことを考察してみた。なお本論はおもに②尾参宝鑑と③愛知県統計資料の分析によつて調べてみた。筆者はかつて「④産業革命期における尾西機業地域」を発表したことがあるので、本論はその続編とする。

註

① 阪神地方では明治三年一二月堺紡績所が開業し、五年四月官營となり、京浜地方では鹿島紡績所が同年九月に操業を開始している。これに対し名古屋では一七年に、漸く名古屋紡績が開業した。

② 小菅廉 尾参宝鑑 明治三〇年一〇月発行。

③ 明治四〇年愛知県統計書 明治四一年発行。このほか名古屋市史 大正三年発行。名古屋市における工業適地に関する研究 名古屋商工会議所 昭和一〇年発行。

④ 川崎 敏 「産業革命期の尾西機業地域」歴史地理学 紀要 六 昭和三九年一二月。

## 二 明治前期の工業化

名古屋における初期の工業化は、すでに江戸時代からであるが、本格的に工業化が始まったのは明治時代からである。江戸時代の工業は城下町の中において、日用品や工芸的なものが製造され<sup>⑤</sup>、これが明治初期にも継続して、家内工業やマニユ的な生産形態をとっていた。ところが明治一〇年、七曲町（<sup>⑥</sup>旧城下町の東南）に県立養蚕所が設立され、群馬県より工女を招いて座繰製糸の講習が始まった。また二一年には撞木町（<sup>⑦</sup>旧城下町の東）に太田組製糸場が設立され、二九年には市外（現在は市内）西春日井郡金城村（<sup>⑧</sup>名古屋城の北）に製糸工場がつくられている。しかし生糸の製造は明治政府が殖産興業を奨励したにもかかわらず発達していない。これに比してこの頃の尾北地方の農村地域は、蒸気力を使用した製糸工業が盛大を極めている。名古屋のような都市地域においては原料・水利・労働力などが、必ずしも発展の条件を提供しなかったようである。

綿糸工業においては一二年に機械綿糸が計画されたが実現に至らず、漸く一七年になって村松彦七等による名古屋

紡績が開業した。この紡績会社は正木町（<sup>④</sup>大須観音の南）に資本金三万四七〇〇円、鍾数四〇〇〇、職工一〇八人の企業で、発足している。なお二七年には五〇万円に増資し、二九年には一〇〇万円に増資、三八年には鍾数三万〇三八四、職工一三六五人に成長している。市外（現在は市内）では二二年奥田正香等による資本金五〇万円の尾張紡績が愛知郡熱田町尾頭に開業、一万五〇〇〇鍾を設備し、二六年には三重紡績愛知分工場が、愛知郡那古野村下広井（名古屋駅南）に開業し、綿糸のほか広幅綿布の製造を兼業している。この三紡績会社は何れも蒸気力を使用して近代化の道を歩き、産業革命の先頭に立っている。

織物工業においては、江戸時代から木綿の飛白を織出した佐々絰が製織されていたが、明治一四年久屋町（旧城下町の東）に県立織工場ができ、さらに一九年には下堀川町（旧城下町の南、堀川筋）に佐々織会社がつくられている。また佐々絰は明治一一年祖父江源次郎が士族婦女子授産の目的をもって、資本金一万二〇〇〇円の愛知物産組を組織し、工場を七曲町（旧城下町の東南）に設け、後に高岳町（旧城下町の東）に移転し、ガス糸を使用した絹綿交織の双子織も製織した。また岡木綿は絞仲買商尾関清治郎が、真岡木綿の需要不能を慨き、一九年に谷徳治郎に依頼して製織したのが始まりで、二六年には舎人町（旧城下町の東）に名古屋製織会社をつくっている。博多織は二二一三年ごろ野村甚三郎が博多より当市豎杉町（名古屋城の東）に住み、興益社という工場を創設して製織を始め、絞は慶応三年に脇部与右衛門が下園町（旧城下町内）に始め、二年には七間町（旧城下町内）に国産所をつくっている。綿毛布は一六年吉村富三郎によって玉屋町（旧城下町内）に、タオルは二三年竹内伊右衛門が前塚町（大須観音付近）に、メリヤスは一八年に佐藤某が始め、二二年に伊藤伝七が上長者町（旧城下町内）に製造販売を始めている。

このように織物業は尾西・知多などの周辺地域に比して遅れて発生したが、一〇年代には基盤を形成し、二〇年代

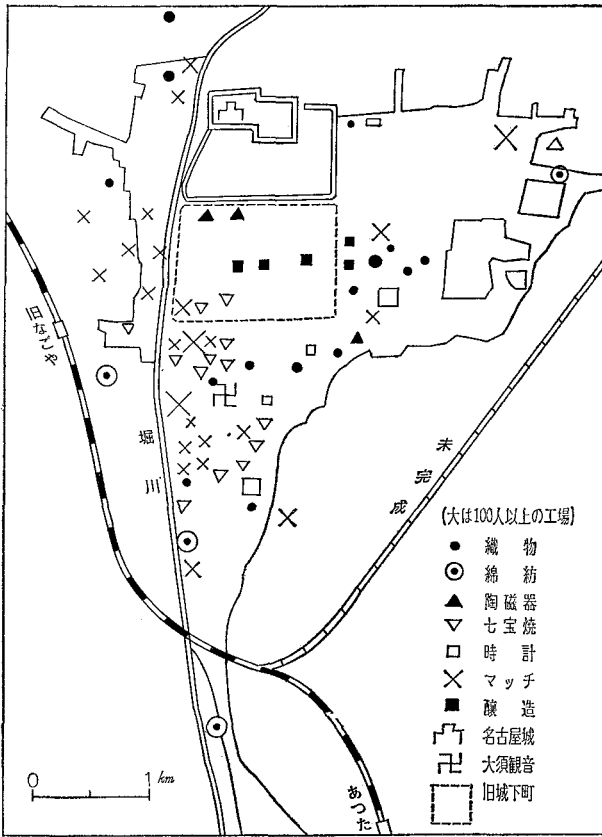


図1 明治28年の工業化（職工10人以上の工場）

東)の二〇年創設の田中織物は綿毛布・肩掛・膝掛を製造し、男工三五・女工一五人をもっていた。しかし織物工場は出機をもっている関係から、出機の職工数も含まれている場合があるので、職工数は必ずしも、その工場内で働いている数とは限らない場合もある。統計に従えば一〇人以上の工場は一五、内訳は一〇〜一九人が六、二〇〜四九人が三、五〇〜九九人が二、一〇〇人以上が二、不詳が一となっており、創立年は元年が一九九年が四、二〇〜二九年までが

に著しい発展を示している。二八年におけるおもな工場をあげてみると、絹綿交織物を製造していた堅代官所(旧城下町の東)の愛知物産が二三年に創設され女工三一五人、すでに述べた愛知物産組は絹綿交織や木綿織物を製造し女工七三八人、南長島町(旧城下町の南)の一五年創設の坂本工場は綿毛布を製造し女工五八人、駿河町(旧城下町の

表 1 明治28年の名古屋市(旧)の工業(職工10人以上の工場)

		綿糸	織物	刺繡	醸造	陶磁器	銅七宝	マツチ	時計	建具	硝子器	団扇	提燈類	其他	計
工場数		1	15	17	7	9	16	24	4	2	5	3	5	8	116
職工	10~19人	6	15	7	2	14	4	1	1	4	2	4	7		67
	20~49人	3	2		2	2	5		1	1	1		1		18
	50~99人	2			2	8	1								14
	100~1,000人	1	2		2	7	2						1		15
	不詳	1			1										2
創立案	明治以前				1	2						1	1	1	6
	明治19まで	1	4	2	1	4	8	9	1	1	3	2	1	3	40
	20より28まで	11	15	3	5	6	15	3	1	2			3	4	64
	不詳				2										2
動力機	汽機	1							3						4
	なし	15	17	7	9	16	24	1	2	5	3	5	8		112

尾参宝鑑(明治30年発行)の工場名簿によって筆者が整理解作成した。このほか有力な工場に、汽機を使用した愛知郡熱田町の1077人の紡糸工場と同那古野村に1762人の綿糸・綿布工場があった。この時代には石油・ガス発動機。発電機・電動機を使用している工場はない。

一一となつてゐる。地域的には旧城下町の東部から南部にかけての台地上に分布しているが、この地域にはかなりの賃機があつたと想定される<sup>⑧</sup>。

陶磁器工業は明治一六年滝藤万次郎が南外堀町(旧城下町内)に輸出向の彩磁製造所をつくり、画工一〇〇人を養成したが、やがて名古屋陶磁器画焼付組合を組織し、画工二二〇〇人が加入している。これが現在、瀬戸で生産された陶磁器を絵付加工する工場の創立となつて現われている。二二年には加藤梅太郎が七曲町(旧城下町の東南)に田代支店を設け、陶磁器貿易を開始した。二八年における製造戸数は三一、登窯

一（五間）、錦窯二二五、職工一、二〇〇人、生産五〇万円で、一〇以上の工場は五工場である。最大の工場は南外堀町の滝藤画工場で職工男八〇人、次が南武平町（旧城下町の東南）の松村磁器製造所で職工男三三・女八人であった。

後者は村松八次郎が設立したもので、二九年には新栄町（旧城下町の東）に移転し、さらに後には愛知郡千種村に移転している。外延的工場移転のよい例である。二八年にはこのほか一〇人以上の工場は西瓦町（旧城下町の東南）に陶磁器画焼付工場（男工三〇人）、新出来町（旧城下町の東）に陶磁器製造所（男工一三・女工二）、前津小林（旧城下町の南）に不二見焼（職工数不明）があった。なお三九年になると白壁町（旧城下町の東）に松風支店工場が輸出陶器製造を開始したが、このころから陶磁器の輸出が漸次活発化している<sup>⑩</sup>。

七宝焼の製造は江戸時代から七宝村で行なわれていたが、四年岡谷惣助が鉄砲町（旧城下町）に七宝会社をつくり、一三年に工場を横三蔵町（旧城下町の南）に移している。一四年には川出柴太郎も七宝製造所を開設、一五年には林小伝次が八百屋町（旧城下町の南）に、一六年には安藤重兵衛が矢場町（旧城下町の南）に製造を始めた。セメント工業は二〇年高島嘉右衛門によって、愛知セメント商會が、愛知郡熱田町白鳥（熱田神宮の西）につくられ、二八年には蒸気力を使用し、職工一五五人の工場に成長している。

ガラス工業は明治二年谷半十郎が押切町（名古屋城の西）に菓ビンや玩弄品の製造を始め、四年には松本新平が南武平町（旧城下町の東南）に水呑コップやランプのホヤの製造を始め、八年には八神幸助が撞木町（旧城下町の東）に菓ビンの製造を、二一年には中市場（城下町内）の石塚元三郎と西二葉町（名古屋城の東）の石塚岩三郎が協力して、元三郎は販売、岩三郎は製造に従事している。また二八年には柴田建次郎が南鍛冶屋町（旧城下町の東南）にランプ製造をやっている。このころは何れの工場も職工一〇〜二〇人未満であるが、最大なものは撞木町の八神硝子で

職工二五人をもつていた。

木製品工業は尾張藩が木曾の山林をもつていたので、江戸時代から名古屋が木材の集散地となり、建具・桶・樽・仏壇などの製造が盛んであった。明治五年ごろ関鍛冶町（旧城下町の東）に堀田吉兵衛が人力車を製造し、一三年ごろになると東片端町（旧城下町の東）の国枝歙吉も製造している。またこれと同時に荷車の製造も盛んになり、やがて鉄製車輛工業へと発展している。すなわち二九年奥田正香等が資本金五〇万円で日本車輛を堀ノ内町（名古屋駅の付近）に仮工場をつくり、また同時に古渡町（旧城下町の南）には鉄道車輛が設立された。なお一九年には上島町（旧城下町の西）に浅野工場（職工一〇人）が蒸気力を使用してセメント樽・材木挽木を行い、二一年には針屋町（旧城下町内）に安井工場、二八年には西洲崎町（旧城下町の南）に名古屋建具製造会社（職工二五人）が創設された。

表 2 明治28年の工業生産

（単位：綿糸は1,000貫）  
（その他は1,000円）

綿		糸	382
織		物	275
陶	磁	器	500
七		宝	221
扇		子	114
マ	ッ	チ	176
刺		繡	17
漆		器	82
麦	徑木真	田	24
度	秤量	器	20
油		類	286
酒		類	263
醬	油	溜	150
綿	毛	布	118
時		計	206
団		扇	27
提		燈	90
硝		子	17
	靴		80
	傘		37
口	ウ	ク	35
菓		子	98
塗		箸	14

名古屋市史(大正4年発行)

による。塗箸は29年のもの

東)に移転している。これが後の林時計で二八年には職工四二八人に成長した。また二五年には水野伊兵衛等が愛知郡御器所村に時計製造を開始し、二六年には

の時計工業も車輛工業と共に、木製品工業の発達と関係が深く、明治一七、八年ごろ中条勇次郎が掛時計を製造したのが始まりで、二四年には杉ノ町（旧城下町の東）に時盛社をつくり、さらに同年松山町（旧城下町の東、杉ノ町の



資本金五万円をもって愛知時計を東橋町（大須観音の東）につくったが、専ら木製品を製造している。これも二八年には職工二九六人、蒸気力を使用した工場に成長した。また二七年には加藤時計が伊勢町（旧城下町内）に、鶏印時計が東二葉町（名古屋城の東）に、二八年には星野時計が矢場町（旧城下町の南）に、同年明治時計が前津小林に創設されているが、この年代までに時盛社・愛知時計・鶏印時計の三工場は共に蒸気力を使用している。さらに二九年には水野時計が城番町（旧城下町の東）に立地した。

機械工業は地場産業と結びついて発達した織機が注目される。車輛工業も時計工業も機械工業に属するが、これらと同時に織機の製造が始まった。二三年豊田佐吉が木製人力織機を発明し、二八年には動力用豊田式織機がつくられ、三八年には自動織機が完成している。この間、豊田商会が武平町（旧城下町の東）に工場をつくって生産に乗り出し、また二六年には東古渡町（旧城下町の南）に松井工場が織機や石油発動機の製造を行なっている。これ等織機の製造は織物工業を飛躍的に発展させているが、明治末期から大正に至るまで従来の手織機がかなり多く、永い間使用されていた。

マッチ工業は明治一三年高岳町（旧城下町の東）の杉山弥三郎が、医士麻生頼三郎について発火薬調剤の法を習い石橋町（旧城下町の東）に真巖社を起し、同年筒井町（旧城下町の東、建中寺付近）に工場を移している。一四年加藤某は仲ノ町（旧城下町）に軸木の製造を始め、長坂多門は神戸より職工を招いて下堀川（旧城下町の南、堀川筋）に燧巧社を設立した。二八年における職工一〇人以上の工場は二四あるが、そのうち一〇〇人以上の工場は七ある。真巖社は男工四九・女工二二八に成長し、一五年に創設された中ノ町（旧城下町）の新栄社は男工二〇・女工二二〇人、二五年に創設された山口町（旧城下町の東）の城東社は男工三五・女工一〇〇人、同年創設された葛町（旧城下

町の南)の新栄第二工場は男工一五・女工一五〇人。同じく東新町(旧城下町の東)の新栄第三工場は男工二〇・女工一四〇人、三六年創設された松重町(旧城下町の南)の新栄第五工場は、男工五・女工二五人である。また市外(現在は市内)では愛知郡那古野村(名古屋駅付近)に清進社(男工三〇・女工四五)が二六年に創設されている。このようにマッチ工業は一三年に始まり、二〇年代に急激な発展をしている。当時としては近代的な工業であったと思われる。明治前期の名古屋の工業の発展過程をみると、繊維工業とマッチ工業が飛躍的に伸びたことは注目される。また繊維工業は綿紡のように大型工場が成立した反面、零細的な織物工業がみられるが、マッチ工業は職工五〇〜一〇〇人前後が最も多いという中型形態をとっているのが注目される。

醸造業は江戸時代から城下町内において行なわれていた工業のうち、有力なものであったが、これが明治になっても永らく旧城下町の区域で行なわれた。明治二八年の統計によると酒醸造所四四、醬油製造所四〇、そのうち職工一〇人以上の工場は酒造が四、清酔が三となっている。醬油味噌はおそらく一〇人以下の工場である。酒造は呉服町(旧城下町内)久屋町(旧城下町内)神楽町(旧城下町内)矢場所(旧城下町の南)にそれぞれ一、清酔は水主町(旧城下町の南)に一、袋町(旧城下町内)に二が分布していた<sup>⑧</sup>。

明治元年から一〇年ごろまでは、江戸時代からの家内工業やマニファクチャが継続し、工業製品もほとんど同じであった。ところがその後一〇年ごろから二〇年までの間に、漸次近代工業が勃興し、二〇年代に工業化が顕著に現われてきた<sup>⑨</sup>。それは絹織・綿糸・綿織などの繊維工業や陶磁器・七宝焼・ガラス・掛時計・竹木製品・マッチ・セメントなどの工業であるが、なかでも綿糸紡績工業は資本主義的な形態のもとに、産業革命の先頭に立っている。また当時新型工業として現われたマッチ工業は、この時代に急激な発展を上げている。そして鉄製機械工業は漸く芽

ばえた程度で、後期を待たなければならなかった<sup>⑧</sup>。

## 註

- ⑤ おもなものは味噌・醤油・酒・酢などの醸造品や団扇・扇子・提燈・傘などの竹細工、桶・樽・建具・仏壇・履物などの木製品のほか塗箸・漆器・陶磁器・七宝焼・菜種油・綿実油・織物・鍋釜などである。
- ⑥ 旧城下町とは北は名古屋の外堀から南は広小路、西は堀川から東は久屋町までの碁盤目型の道路内で、南北一キロ、東西一五キロである。明治初期の工業化は、旧城下町に接近した東南部から始まった。
- ⑦ 旧城下町の東部は江戸時代には下級武士の住宅と多数の寺院と空地があったが、明治になると漸次市街地化され、その空地の中に工場が立地してきた。またこの空地は桑園化されている。
- ⑧ 名古屋城の北部は江戸時代から明治にかけては、ほとんど水田地帯であった。
- ⑨ 江戸時代に南北に伸びる城下町の中心道路、本町通りの延長から熱田を結ぶ線上に、大須観音ができ門前町を成立させた。明治時代はこの門前町の周辺に工業の拠点が現われ、旧城下町南部工業地域を形成している。
- ⑩ 尾参宝鑑によれば明治二八年名古屋における織物製造戸数一四五、織機一六二二台。同年尾西地方の中島郡は織物製造戸数一八九九、織機一万九〇三六台、葉栗郡は織物製造戸数一〇四八、織機四五九六台であり、知多郡は織物製造戸数一万〇二四七、織機一万二六六一台あった。
- ⑪ このころ一〇人以上の工場は名古屋は五であったが、瀬戸では三五。名古屋は何れも明治時代の創設であるが、瀬戸は明治以前の創設が二五ある。
- ⑫ 名古屋市史(大正四年発行)によると、明治二年は陶磁器三六万円、綿糸一六・九万円、油類一一・五万円、織物一〇・七万円、七宝焼八・五万円、漆器五万円、扇子三万円、刺繍二・五万円、マッチ一・二万円、麦糰真田〇・三万円となっており、醸造品の生産高は記されていない。
- ⑬ 尾参宝鑑によって、明治二八年の工場規模について、職工一〇人以上の一六工場を分析してみると、マッチ工場が最も多く二四、次がハンカチーフ刺繍が一七、銅七宝が一六、織物一五、陶磁器九、醸造七、硝子器と提燈類が各五となっており、一〇〇人以上の工場は一五で一七%を占め、なかでもマッチ工場が最も多く七、織物・陶磁器・時計が各二、綿糸一、提燈類

一となっている。しかし市外（現在は市内）を含めれば、愛知郡那古野村に男工四〇七・女工一三五五人の綿糸綿布工場と熱田町に男工二二六・女工八五一の綿糸工場と同じく熱田町に男工一五〇・女工五〇のセメント工場がある。ついで五〇〇九九人の工場は一四でやはりマッチ工場が八工場も含まれ、織物陶磁器が各一、時計一となっている。二〇〇四九人の工場は一八、これもマッチ工場が最も多く五、次が織物三、一〇〇一九人の工場は六七でハンカチーフ刺繍が一五で最も多く、次が銅七宝一四、醸造七、織物六がこれに次いでいる。このほか漆器二二四戸（職工六七四人）、酒類四四戸（醬油三五戸）、煙草八八戸、和紙九一戸となっている。

⑭ 金融機関は明治一〇年第八国立銀行名古屋出張店、一一年第一三四国立銀行、一四年伊藤銀行、一五年名古屋銀行が設立され、二六年になると名古屋貯蓄銀行、尾三銀行、尾三貯蓄銀行、明治貯蓄銀行が設立されている。また交通機関は二二年に東海道線全通、二九年に関西線全通、三五年に中央線が中津川までのびた。

### 三 明治後期の工業化

⑮ 明治三〇年以後は独占資本の強化、企業の階層分化、動力革命による生産様式の変化、地域的展開の活発化などが注目されるが、業種別にみれば特に綿紡と織物工業の飛躍的な発展、機械工業の進歩がみられる。すなわち紡績工業は産業革命の先頭に立ち、多量生産による内需と輸出の供給を専らにして近代化の道を歩いた。三八年になると下広井・正木・熱田の三大紡績会社が合併して、更に強力なる企業となり東洋紡績と改名した。四〇年におけるこれらの工場は、職工数男八四五・女三五八四人となり、錘数七万六六〇八に成長し、しかも汽機五（二五二〇馬力）、発電機四（一五〇キロワット）を設備し、石炭消費量二万一四五六トン、生産三四〇万貫をあげている。かくして紡績工業は名古屋地域における圧倒的な商品生産の地域パターンを形成し、綿糸と広幅綿布を生産した。

これに対し絹糸製造は発展せず、四〇年の統計によると機械製糸は撞木町（旧城下町の東）の太田組が男工一・

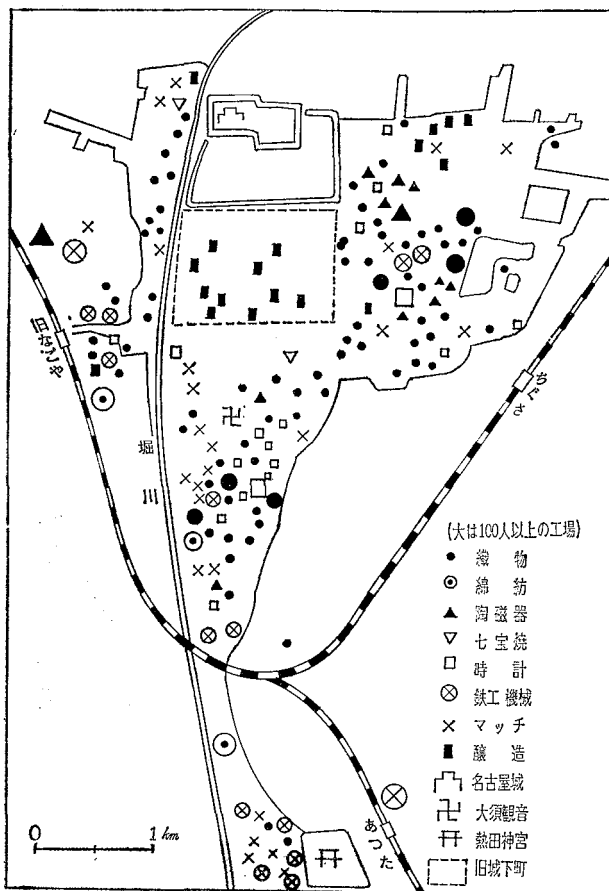


図 2 明治40年の工業化 (職工10人以上の工場)

女工六、新出来町（旧城下町の東）の岡田製糸が男工一・女工一五で、前者は汽機（四馬力）、後者は汽機を使用していない。なおこのほか座繰製糸が四〇あったが、何れも零細のものであった。織物工業は紡績工業と平行して発展し、四〇年の統計によると機業戸数は一五九二、内訳は工場四三・家内工業一一九・織元二〇・賃織業一四一

〇で、織機は工場が力織機七八五に対し手織機二〇三〇、家内工業が一〇対六六六、織元が〇対一五、賃織業が〇対一八三九となっている。すなわち機業戸数の八八％は賃織、織機八五％は手織機である。紡績業が急激に機械化しているのに比して、織物業は明治末期になっても、なお手織機に依存する比率が大で、賃織による生産が行なわれている。職工一〇人以上の工場

表 3 明治40年の名古屋市(旧)の工業 (職工10人以上の工場)

		絹糸	綿糸	織物	染物	製綿	醸造	陶磁器	七宝焼	マツチ	時計	木工	鉄工鑄物	硝子	団扇扇子	其他	計
工場数		2	3	77	7	6	22	14	2	26	17	21	16	10	4	52	279
職工	10~19人	1	45	6	4	20	7	1	4	4	9	9	8	1	34	153	
	20~49人		18	1	2	2	3	1	16	4	7	6	2	2	13	77	
	50~99人	1	7				3		6	7	1	1		1	3	30	
	100~999人		7				1			2	4					2	16
	1,000~2,000人		3														3
創立年	明治以前				1	1	13					1	4	1		2	23
	明治19年まで		5		2	4	2		4		2			2	9		30
	20~29年まで	1	2	16	5		1	2	1	11	4	3	2	5		18	71
	30~40年まで	1	1	55	1	3	3	10	1	11	12	15	9	4	2	22	150
	不詳		1				1				1		1				5
原動機	汽機	1	6	1	1							3	8			8	28
	石油・ガス発動機		3								1	1	5			2	12
	発電機	3	2		4	2				15	13	4				14	57
	なし	1	66	6	1	20	14	2	26	1	4	9	10	4		28	192

愛知県統計書(明治40年発行)の工場名簿によって筆者が作成した。原動機2つ以上使用の工場は高度のものを表に入れた。木工は木製機械を含み、其他の中には印刷14、度量衡7などが含まれている。(旧)とは当時の名古屋市域。

について調べてみると、工場数七七で、内訳は一〇の一九の規模工場が四五、二〇一四九人が一八、五〇一九人が七、一〇〇人以上が七となっている。次に動力についてみると電動機を使用していた工場は二、石油発動機三、汽機六となっているが、これは一〇人以上の規模工場の一に当っており、全機業戸数の〇・六%である。ほとんど無動力で生産していた。

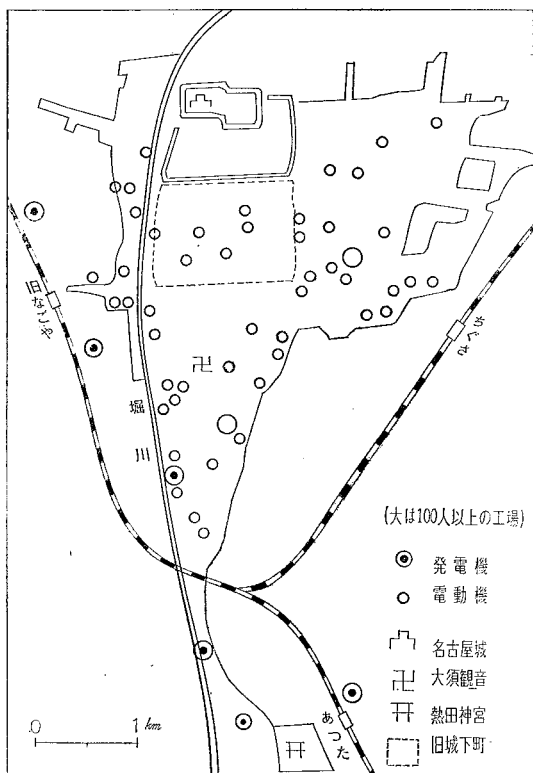


図3 明治40年電力化（職工10人以上の工場）

織物工場の分布をみると、職工一〇人以上の工場七七のうち旧城下町の東部、すなわち旧城下町以東から山口町・車道町を結ぶ間（現在の東区）に二二%、旧城下町の西部、堀川以西から東海道線の間（現在の西区）に二五%、残余の五二%は旧城下町の南部、広小路通から大須観音周辺をへて東古渡町に至るところ（現在の中区）に分布している。なおこのほか一五〇〇の家内工業・賃織による零細工場が、これらの地域に混在していた。

動力を持たず琉球絣を主として生産していた蛭子町（旧城下町の南）の水野工場は男工一八〇・女工一七で、男工が女工に比して極めて多く、男工が賃織廻りと絞りに従事していたと思われる。

つぎに職工一〇人以上の工場の創立年を調べてみると、明治以前はなく、明治元～一九年が五、二〇～二九年が一六、三〇～四〇年が五五、不詳が一で、三〇～四〇年は六一%を占めている。絹糸業は職工一〇人以上二のうち、二〇～二九年が一、三〇～四〇年が一、綿糸紡績工業は

表 4 明治40年の工業生産 (単位は 1,000円)

糸物	7,083	傘	24
織物	2,819	硝子	79
綿織	312	靴	120
綿刺組	400	蠟菓	82
足染	320	塗	1,034
莫陶	354	ポ	126
七マ	574	ン	106
漆	295	車	660
麦	2,696	茶	111
度	100	箱	67
油	635	桶	268
罎	312	樽	146
經	26	櫃	764
木	87	鼻	125
真	116	緒	148
田	396	玩	305
器	456	鉞	762
類	820	仏	46
酒	53	指	136
味	273	石	990
噌	212	罐	402
酢		セ	
計		メ	
扇		ン	
子		ト	
燈		織	
		機	
		および	
		機械	

名古屋市史(大正4年発行)によって調べた。ただし織機および機械は県統計(明治41年発行)によった。なお本文の生産高は県統計資料を使用した。よって本表と多少相違する。

三のうち二〇一、二九年在二、三〇一、四〇年が一となっており、創立年からみると繊維工業のうち織物工業は明治二〇年以後、急激に発展し、特に三〇一、四〇年に大正時代への基盤を形成したとみられる<sup>②</sup>。これに対し染物工業は創立年代の古いものが多いが、前者に比して発展してない<sup>②</sup>。

陶磁器工業は明治前期は南外堀町(旧城下町内)、前津小林(旧城下町の南)、武平町(旧城下町の東南)新出来町(旧城下町の東)に分散し

ていたものが、明治後期には旧城下町の東部の瀬戸に近い地域に集中し、規模も大となっている。四〇年における職工二〇人以上の一四工場について調べてみると、旧城下町の東部の撞木町に四、東芳野町一、主税町一、横代官町一、長堀町一、舎人町二、新栄町一、西瓦町一となっており、南部には前津小林一、東古渡町一である。創立年代は三〇一、四〇年が最も多く七一%を占めている<sup>②</sup>。おもな工場は撞木町の陶器絵付を主とする石小工場が職工男九五・



女二三、次が同所の陶器製造を主とする森村工場で、職工男五〇・女三〇である。とくに注目すべきことは三十七年に市外（現在は市内）愛知郡中村則武（旧城下町の西、名古屋駅付近）に日本陶器会社が創立されたことであるが、この工場は四〇年になると発電機一（七五馬力）、汽機一（八五馬力）を持ち、職工は男八三二・女一七五人に成長し、綿紡と共に名古屋における産業革命の先頭に立っている。硝子工業は明治二八年には職工一〇人以上の工場が五であったが、四〇年には一〇工場に増加している。創業年代は明治以前が一、二〇、二九年が五、三〇、四〇年が四。おもな工場は明治前期から営業していた西二葉町（名古屋城の東）の石塚工場が男工二八が最大、次が撞木町（旧城下町の東）の木村硝子が男工二五、東二葉町の松本硝子が男工一八で何れもビン類やランプのホヤを製造していた。

車輛工業は人力車や荷車<sup>⑧</sup>などの木製品工業から始まり、三一年になると熱田東町に一万六〇〇〇坪の敷地を求めて、日本車輛が堀内町から移転してきた。また二九年には古渡町に鉄道車輛が立地している。四〇年には前者は汽機二（四〇馬力）、発電機（一八〇キロワット）、電動機二七（一四一馬力）をもち男工四一〇・女工五の企業となり、一カ年間に鉄道用客車三三九個（二二・九万円）貨車四二〇個（三三・五万円）の生産をあげている。また後者は三七年に陸軍省に買収され熱田兵器所となり、弾薬・鉄車・鉄舟の製造を行なった。

時計工業は明治二〇年ごろから始まったが、三〇年以後になると飛躍的に発展した。この工業は伝統的な木製品工業に機械工業が加わって成立した工業で、製品も木製掛時計や木製置時計である。三〇年以後の立地状態をみると、三三年に前津小林（旧城下町の南）に高野時計、三五年に宮出町（旧城下町の東）に安井時計、三六年に西洲崎町（旧城下町の南）に神谷時計、三七年に前ノ町（旧城下町の東）に水谷時計、三八年に前津小林にハアードエッチ、

同所に時計外面を製造した名古屋製函、門前町（旧城下町の南）に石田時計、下笹島町（旧城下町の西）に尾張時計、四〇年に西瓦町（旧城下町の東）に佐藤時計、四一年に松山町（旧城下町の東）に林時計が立地している。なかでも林時計は職工数が最大で男一七九・女二二で電動機二（一八馬力）、愛知時計は職工数男二二〇、電動機三（一一一馬力）である<sup>㉞</sup>。その他の機械工業については、地場産業と共に発達した織機が、三一年になると豊田商會が武平町（旧城下町の東南）から島崎町（旧城下町の西、名古屋駅の北）に移転し、四〇年には資本金一〇〇万円の豊田式織機株式会社と改称し、鉄製・木製、小巾・広巾の織機を製造している。四二年には更に綿物や絹綿交織機を發明し、専ら力織機の製造に乗り出し、職工数男一六五人、ガス発動機一（二四馬力）、石油発動機一（三馬力）を設備している。また三一年には大隈栄一が製麵機を發明して、富士塚町（旧城下町の東）に工場を設け、四〇年には職工男二〇人、電動機一（三馬力）を設備した<sup>㉟</sup>。

マッチ工業は明治二〇年代には飛躍的に発展しているが、三〇年以後はむしろ停滞・縮小状態となった。それは職工二〇人以上の工場が二八年には一九あったが、四〇年には一五に減少し、また二八年には一〇〇人以上の工場が七あったが四〇年には一〇〇人以上の工場はない。これは縮小・転業・移転の何れかと思われる<sup>㊱</sup>。醸造業は明治四〇年には酒類は製造戸数二八、男工一七六、製造高三六・五万円。味噌は製造戸数三四、男工一一九・女工六七、製造高一九・〇万円。醤油は製造戸数四九、男工一一九・女工六九、製造高三六・五万円。酢は製造戸数三、男工五〇、製造高五万円。職工二〇人以上の工場は醸造業合計して二二工場あるが、この工場を調べてみると創立年代の古いものが多い<sup>㊲</sup>。ことと、地域的には旧城下町に立地しているものが多いことが特色である。明治四〇年は電力化地域が普遍化され、図3の示す如くほとんど全市におよんでいる。綿紡三工場、陶磁器一工場、車輛一工場、汽機製造一工場

は自工場で発電機を設備し、其他五一工場は電動機を使用するようになった。

## 註

⑮ 明治二九年には愛知郡御器所村の一部、三一年には愛知郡那古野村・古渡村東古渡が名古屋市に編入、一六・二九平方キロ、人口二四万四〇〇〇人となっている。よってこの時期を境に前期と後期に分けた。なお四〇年には熱田町が名古屋市に合併し、名古屋港が開港場に指定されている。

⑯ 明治政府の殖産興業によって、明治一〇年桑園（面積、二町一反四畝三步）を、東外堀町一丁目に設け良種を植え、県立養蚕伝習所、県立養蚕所を設置して養蚕と座繰製糸を伝習せしめ、養蚕製糸の発達を計った。なお一年には東外堀町の桑園を大拡張し、旧城下町東部にも桑を植えたが、前期で述べたように発展せず一五年県立養蚕伝習所を公売している。

⑰ 市外（現在名古屋市）では西春日井郡金城村（名古屋の北）に原名古屋製糸が男工二〇、女工三九七、汽機一（一五馬力）を設置。同六郷村（名古屋城の北）に近藤製糸が男工三・女工八〇、汽機一（四馬力）を設置。愛知郡千種村（旧城下町の東）に田中製糸が男工三・女工三〇、汽機は使用していない。この程度のものが市の北と東に分布していた。

⑱ 織物業の職工数は賃織の職工数まで含んでいる場合があるので、他の業種のように明らかなでない。何れにしても機業戸数のほとんどは零細の経営で九五％は一〇人以下、しかも賃織の如きは所有織機台数が一〜二台と思われる。

⑲ 電動機使用工場は葛町のタオル綿ネルを生産した野々垣工場が、男工三・女工一二で機関一（二馬力）、下笹島町の岡木綿を生産した桜井綿布が、男工二・女工二八で機関一（三馬力）、石油発動機使用工場は高岳町の各種織物を生産した愛知物産組が、男工二七・女工四三九で機関一（五馬力）、白壁町の白木綿を生産した服部木綿が、男工八・女工四二で機関二（一〇馬力）、新出来町の真岡木綿を生産した中村綿布が男工九・女工五〇で機関二（一六馬力）、汽機使用工場は堅代官町の綿織物を生産した愛知織物が男工六八・女工二五〇で汽機一（五馬力）、舎人町の綿織物を生産した名古屋製織が男工二五・女工一三〇で汽機一（一五馬力）、前津小川の白木綿を生産した祖父江製織が、男工二二・女工六三三で汽機一（三〇馬力）、同じく前津小川の織物起毛を行う日本起毛が男工八・女工七で汽機一（二五馬力）、熱田町の満州木綿を生産した名古屋綿布が男工三三・女工一六六で汽機一（馬力不明）である。

⑳ 絹織物は紋織〇・三万円（一、〇〇〇円未満は四捨五入）、袖太織二・九万円、紹〇・三万円、男帯地二万円、女帯地六・五万円、其他〇・一万円。絹綿交織物は二子其他糸入木綿類一五万円、其他〇・二万円。綿織物は白木綿四九・一万円、二子其他綿木綿一・二・三万円、緋木綿一・二・三万円、織色木綿類〇・四万円、綿フランネル二七・七万円、袴地〇・八万円、小倉地三・八万円、男帯地一・四万円、其他三五・五万円、機械織広巾白木綿七六・二万円、タオル二・五万円、綿毛布三一・二万円。毛織物はセル四・二万円、膝扇掛一・五万円、其他〇・六万円となっている。大企業が白木綿の生産に従事するのに対し、中小企業は大企業では生産しにくい手のこんだ織物を生産している。

㉑ 現在は明治時代の織維工業地域には、工場はなく、質織による機業戸数も絶無である。

㉒ 染物工業は一〇人以上の工場が七、一〇〇〜一九人が六、二〇〇〜四九人が一となっており、汽機使用は一で他は動力がない。創立は明治以前が一、二〇〇〜二九九年が五、三〇〇〜四〇年一となっている。なお今少し詳しく調べてみると中形が工場一（男工一〇）家内工業一二（男工三五）、更紗が工場三（男工四五）家内工業二二（男工八八）、紋りが工場三（男工三一・女工二）家内工業一三（男工四二・女工二）となっている。

㉓ 四〇年の製造戸数は陶器五（男工五五・女工三）、磁器四〇（男工一三〇五・女工二五三）、登窯は前者が二筋（五間）、後者が五筋（二〇間）、錦窯は二五五、其他七、製造品は両者合せて二三七・六万円。また職工一〇人以上の一四工場のうち一〇〜一九人が七、二〇〜四九人が三、五〇〜九九人が三、一〇〇人以上が一で、前期に比すれば大型化し、飛躍的な発展をしている。しかし何れも動力は使用していない。

㉔ 四〇年人力車は製造戸数二二（男工八五）、生産二四一三個、荷車は製造戸数三八（男工五三）、生産二二八〇個、乳母車は製造戸数二〇（男工三二）生産四〇〇〇個。また同年における木製品の製造戸数は一七七（男工八二二）、生産四〇五万円。なかでも一九年に創設された上島町の浅野木工は（男工一四〇人）で汽機・電動機を使用してセメント樽・茶箱・石油箱を製造していた。

㉕ 四〇年の時計製造戸数一七、男工九六八、女工四六で掛時計七七・八万円、置時計二二・三万円生産。分布は前津小林に最も多く四、伊勢山町・東橋町・西洲崎町・下前津町に各一で、旧城下町の南部に多く、東部には城番町二、西瓦町・東二葉町・前ノ川町・宮出町・松山町に各二、西部には下笹島町一となっている。

②⑥ 三二年に堀内町（旧城下町西）につくられた井桁商会は豊田式織機を製造し職工男四〇人、電動機一（二馬力）、四〇年東古渡町（旧城下町の南）につくられた名古屋機械は煙草専用機械を製造し、職工男二〇人、電動機一（一馬力）をもっていた。

②⑦ 分布は市内では旧城下町の東部に一〇、南部に一二、西部に三、旧城下町内に一。市外では愛知郡千種村一、下ノ一色村二となっている。

②⑧ 明治以前の創業が五一%を占め、寛文一、元禄二、寛政二、天保三、嘉永三、安政二、慶応一となっており、醸造業の四一%は旧城下町内に立地している。

②⑨ 名古屋電灯会社が電力供給規定を定めて動力用電力の供給を開始したのが三七年六月であるから、各工場が名古屋電灯会社の電力を動力として使用したのは三七年六月以降である。四〇年になっても大企業が汽機・石油発動機・家用電動機を使用していた。四四年には名古屋電灯が供給した動力は一七三六馬力となっている。

#### 四 結 論

(1) 名古屋の工業化は明治初期においては、京浜や阪神地方に比しておくれ、江戸時代の家内工業的な生産が継続していたが、三〇年ごろから急速に発展し、都市機能を変革させている。

(2) 産業革命の火蓋を切ったのは、一七年に旧城下町の南、正木町に立地した名古屋紡績、ついで二二年には国鉄東海道線全通の年に尾張紡績が熱田町尾頭に、二六年には三重紡績愛知分工場が那古野村下広井に立地して、産業革命の先頭に立っている。しかも地域的には後者が名古屋駅近くの沖積低地に立地したことが意義が深い。

(3) 織物工業と陶磁器工業は、江戸時代から家内工業として存在していたが、両者は明治時代における名古屋の工業化に順調な歩みをもたらしたものとして価値が高く、また地域形成の普遍性にも注目される。すなわちそのパターンは洪積台地上の市街地に喰い込み、明治二八年には前者は製造戸数一三五、織機数一六二二台。後者は製造戸数三

一、窯數二五六をもつて前期の工業地域を形成し、さらに四〇年には前者は機業戸數一五九二、織機數手織四五五〇、力織機七九五におよび著しく成長した。後者は製造戸數四四、窯數二六九とその成長は低いが、統計に現われない絵付作業のような内職的なものが付随しているとみてよい。これが家内工業やマニユ的な経営を存続させている。両者とも後期になると企業化が胎動し産業革命の先頭に立った企業も現われてきたが、それでも零細的な経営の残存性は強く明治を通じて市街地の中から消滅していない。綿紡工業が家内工業的繰綿工業を崩壊しているのに比して、織物工業や陶磁器工業は大企業では生産不能な手のこんだ製品を作り出して残存していた。これが地域に普遍性を与えている。またこの二つの工業は名古屋周辺の地場工業と密接な関係をもつて発展している。

(4) 新規な工業としてガラス工業とマッチ工業は前期に飛躍的な発展をし、名古屋の工業化に新鮮な地域を形成しているが、後期になると織物工業や陶磁器工業が順調な発展をしているのに比して発展性が弱く、全工業生産に対するシェアはむしろ減少している。すなわち前期(二八年)と後期(四〇年)を比較してみると織物工業の生産高が金額で一二倍伸びているのに対し、マッチ工業は三倍、ガラス工業は五倍の伸びを示している。そしてそのシェアは織物工業が一〇%から一一%とやや増加しているのに対し、マッチ工業は五%から二%、ガラス工業は五%から三%に減少している。またマッチ工業の如きは一〇〇人以上の大型工場は消滅し、西部地域の工場數は半減している。しかし堀川筋は残存して南部に集中し、特に熱田地域には新興地域が形成されている。また市外(現在は市内)の一色地域にも海浜に沿って、新しく集団している。

(5) 木製品工業は名古屋が木材の集散地であったため、江戸時代から家内工業的に行なわれていたが、それがやがて産業革命に遭遇すると車輛工業や時計工業へ発展し、当市の特色ある工業となり、綿紡織物陶磁器其他と共に明治

時代の工業地域のパターンを形成している。車輛工業は木製人力車・荷車から鉄製車輛に発展して巨大化し、時計工業は一〇人以上の規模工場が前期四に対し後期一六と増加、さらに巨大化の傾向を示している。また前者の大型工場は南部に立地、後者の時計工業は南部と東部に分散して立地しているが、やがて南部に集中する傾向を示している。また同様に地場産業と直続しながら成立した織機工業は機械工業の発達に貢献し、さらに織物工業に革命的な変革をもたらした。後期における機械工業の立地は、東部・西部・南部に分散しているが、西部の名古屋駅付近と南部の熱田地域に集中している。

(6) 七宝焼は前期は旧城下町とそれに接続する地域に集中し、一〇人以上の規模工場は一六あって、全工業生産に対するシェアは六%を占めていたが、後期は一〇人以上の規模工場は二に減少し、シェアも四%となっている。東部と南部に分散している。

(7) 醸造業は増加の傾向を示し、前期には一〇人以上の規模工場が七であったが、後期には二二になって、しかも旧城下町の中に集中して発展した。人口増加に伴う需要の増加を示している。創立年代の古いものが多いところからみると、新しく立地したものよりも、古く立地した工場で一〇人以下の規模工場が、一〇人以上の規模工場に発展したとみられる。

(8) 動力についてみると前期(二八年)には一一六工場のうち動力を使用した工場は四で僅か三・六%であったが、後期(四〇年)には二七九工場のうち三一%が電力を使用し、電動機五一工場・発電機六工場となっている。すなわち三七年から名古屋電灯が動力用の電力を供給してから急速に電力化地域が増大した。

(9) 明治初年の工業地域は旧城下町およびその接続地に立地していたが、二〇年代になると旧城下町の東部と南部

に拡散していった。そして荷車・荷馬車時代においては鉄道駅との近接関係が強く、東部は三三年中央線千種駅開業までは、ほぼ山口町と新栄町を結ぶ線上で限界を決定している。これに対し南部は大須観音の周辺から堀川筋の台地上を南下し、一九年東海道線熱田駅が開業してからは、台地上から沖積低地へと伸長している。日本車輛の如きは一年に熱田駅近くの、熱田東町の低地に一万六〇〇〇坪の敷地を求めて移転している。また西部においては一九年武豊線の名古屋仮駅が開業し、次いで二二年東海道線が全通して名古屋駅が完成すると、堀川以西の沖積地にも伸長が著しく、三重紡績愛知分工場・日本陶器・名古屋機械製造（豊田織機）の三大企業が立地して新しい工業地域を形成した。鉄道交通に比較的めぐまれない北部は、二九年に原製糸、つづいて帝因燃糸のような企業が成立したが、工業地域としての形成は弱く、また東北部の大曾根地域も四四年に中央線大曾根駅が開業するまでは、工業地域は形成されていない。

さて明治の工業地域の区域をまとめてみると、第2図に示す如くほとんど洪積台地上に分布し、その密度は旧城下町の東部（現在の中区と東区の一部）と南部（現在の中区）に高くつづいてその延長は南部の熱田地域（現在の熱田区の一部）と西部（現在の西区と中村区の一部）に伸びている。すなわち国鉄東海道線と中央線に挟まれた地域にほとんど分布し、業種は混在している。しかし醸造業は旧城下町、陶磁器工業は瀬戸に近い東北部、マッチ工業や木材工業は堀川筋、鉄工や機械工業は南部の延長地域にやや集団して分布しているところもある。